



まちの学芸員 **乾 哲也** (いぬい けんてつ)

小学校6年生の社会科の授業で考古学に目覚め、札幌学院大学卒業後、奥尻町、白老町、礼文町、千歳市で発掘調査を行う。平成14年から厚真町に根差した学芸員。



第4回

北の大地に散った幻の和人開拓
江戸時代のアツマに入った八王子千人同心

はちおうじ せんにんどうしん

北辺国境の危機

江戸時代の後期にあたる西暦1700年代の後半からロシアやイギリスの船が、当時「蝦夷地」と呼ばれていた北海道近海に來航し、調査を始めていました。

1790年代に入ると根室や虻田に來航し、鎖国政策をしていた江戸幕府は危機感を募らせ、1798年に近藤重藏や最上徳内らを択捉島まで派遣させ、調査を命じました。そして、1800年には幕府が蝦夷地を直接支配することとなりました。



アプタに現れた英国船の絵図

北方警備と開拓

幕府の進める蝦夷地の沿岸警備と開拓に志願したのは、旧武田家臣団の「八王子千人同心」でした。1800年、100人の八王子千人同心がはるばる海を渡り、勇払と道東の白糠に50人ずつ移り住みます。

勇払隊は現在のむかわ町汐見地区に開発畑作場を開き、自給自足を目指した農業開拓に取りかかりました。

明治時代の屯田兵の先駆けとも言える八王子千人同心ですが、北海道の厳しい自然環境での開拓は、寒さと栄養失調などにより、わずか2年間で12人もの病死者が出てしまいました。この他にも20人以上の隊士が帰郷し、1804年に八王子千人同心の蝦夷地移住隊は惜しくも解散することとなりました。

浜厚真にも駐屯

勇払と鶴川との中間に当たる厚真川河口部にも4人の八王子千人同心が駐屯してお

り、浜厚真からこの地で倒れた隊士4人とその関係者2名の合同墓碑が発見されています。類似町にある蝦夷三官寺の1つ等樹院過去帖の没年月日を見ると1801年1月12日から4月15日のうちに4人の隊士が亡くなったことが記されています。厳しい寒さと新鮮な野菜が無いことからの壊血病に倒れたようです。

この墓碑は現在、勇払開拓史跡公園内に移されており、他の隊士とともに約200年前のアツマに開拓の跡をおろし、北方警備の任務についていた苦難の歴史を伝えていきます。

八王子千人同心の悲話

組頭であった河西祐介の妻、梅は2人の幼子を残し、25歳の若さで勇払にて亡くなります。恋しき亡き妻を想う夫の気持ちを刻んだ墓石と、残した我が子を心配する梅が幽霊となって「この子にお乳を」と家々の戸をたたく逸話は、現代社会においても大切な愛情を伝えてくれるものです。

浜厚真に入った八王子千人同心たちも故郷に残してきた家族を思いつつこの地に果たしたことと思います。



勇払の蝦夷地開拓移住隊士の墓



アツマ詰隊士たちの墓

発行 / 北海道厚真町
企画・編集 / まちづくり推進課企画調整グループ
ホームページ / <http://www.town.atsuma.lg.jp/>

〒059-1692 北海道勇払郡厚真町京町120番地
電話 / (0145) 27-2321 (代)
メールアドレス / atsuma@town.atsuma.lg.jp